

平成18年度北西太平洋サンマ長期漁海況予報

- 別表の水産関係機関が検討し独立行政法人水産総合センター
東北区水産研究所がとりまとめた結果 -

今後の見通し(2006年8月~12月)

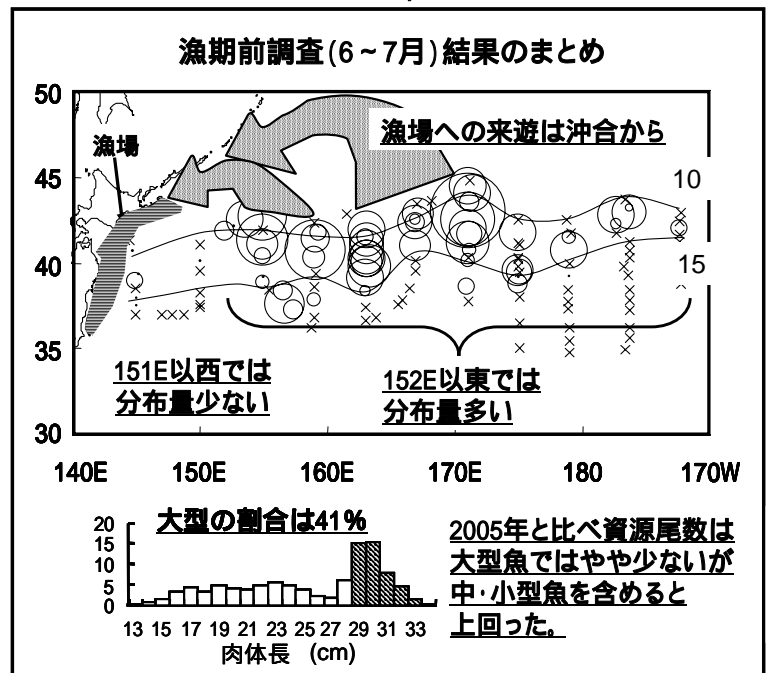
漁況

大型魚の来遊量は昨年を下回るが、中・小型魚を含めた全体の来遊量は昨年と同程度からやや上回る。

大型魚が多いものの、昨年より中・小型魚の割合がかなり高くなる。

海況

親潮の沿岸への差し込みは、平年より南寄り。



問い合わせ先

水産庁 増殖推進部 漁場資源課 沿岸資源班 担当：青木、笠原、田中(博)、佐藤
〒100-8950 東京都千代田区霞が関1-2-1
電話：03-3502-8111(内線7375、7376)、直通電話：03-3501-5098、ファックス：03-3592-0759
電子メール：yuusuke_satoh@nm.maff.go.jp
独立行政法人水産総合研究センター 東北区水産研究所 業務推進部
〒985-0001 宮城県塩釜市新浜町3-27-5
電話：022-365-1191、ファックス：022-367-1250、電子メール：www-tnf@ml.affrc.go.jp

なお、本予報は水産庁のホームページ(<http://www.jfa.maff.go.jp/release/index.html>)、水産総合研究センターにおける我が国水域資源調査推進委託事業のホームページ(<http://abchan.job.affrc.go.jp/>)、及び東北区水産研究所のホームページ(<http://www.myg.affrc.go.jp/>)に掲載されます。

参 画 機 関

北海道立釧路水産試験場	全国さんま漁業協会
北海道立網走水産試験場	社団法人 漁業情報サービスセンター
岩手県水産技術センター	水産庁
宮城県水産研究開発センター	資源管理部 管理課
福島県水産試験場	沿岸沖合課
茨城県水産試験場	増殖推進部 研究指導課
千葉県水産総合研究センター	漁場資源課
東北農政局統計部	独立行政法人 水産総合研究センター
海上保安庁 第二管区海上保安本部	開発調査センター
気象庁	中央水産研究所
地球環境・海洋部 海洋気象情報室	東北区水産研究所
全国漁業共済組合連合会	

平成18年度北西太平洋サンマ漁況予報

今後の見通し(2006年8月～12月)

対象海域 北西太平洋(道東沖から常磐沖)

対象漁業 サンマ棒受網

魚体 大きさは肉体長(体長)で表示し、便宜的に大型魚(29cm以上)、中型魚(24～29cm未満)および小型魚(20～24cm未満)と区分した。

- (1)来遊量:大型魚の来遊量は昨年を下回るが、中・小型魚を含めた全体の来遊量は昨年と同程度からやや上回る。
- (2)魚体:大型魚が多いものの、昨年より中・小型魚の割合がかなり高くなる。
- (3)漁期・漁場:大型船出漁後の漁場は、色丹島南東沖に形成される。三陸沖への南下は平年並で、漁場形成は9月下旬から10月上旬になると予測される。

今後の見通しについての説明

サンマの水揚量は、1990年以降毎年23万トンを超えていたが、1998、1999年にはそれぞれ14.0万トン、13.5万トンに減少し、2000年以降はふたたび20万トンを超えている(2000年:21.2万トン、2001年:26.6万トン、2002年:20.5万トン、2003年:26.0万トン、2004年:20.5万トン、2005年:23.0万トン)。また、2002年以降の177°W以西のサンマの資源量推定値は、284万トン(2002年)、720万トン(2003年)、341万トン(2004年)、362万トン(2005年)であり年ごとに増減をしている。このように、北西太平洋におけるサンマ資源量は2002年以降2.5倍程度の変動を示しているが、2000年以降の水揚量は比較的安定している。

本予報は、参画機関が本年の7月までのトロールおよび流し網による漁獲調査と海洋観測の結果に基づいて行った。

(1)来遊量

6～7月に145°E～165°Wの海域で東北区水産研究所(北海道教育庁北鳳丸(用船)、山口県立水産高校青海丸(用船))が中層トロールを用いて漁獲調査を行った結果、151°E以西の沿岸にはサンマが少なく、152°E以东では多数のサンマが漁獲された。この調査に基づく177°W以西の資源量推定値は416万トンで、昨年(362万トン)をやや上回った。また、大型魚の推定資源尾数は194億尾であり、昨年(246億尾)を下回ったが、中・小型魚は185億尾であり、昨年(27億尾)を大幅に上回った。

6～7月に150°E以西で行われた岩手県水産技術センター岩手丸、宮城県水産研究開発センター拓洋丸、福島県水産試験場いわき丸、茨城県水産試験場いばらき丸、千葉県水産総合研究センター千葉丸の調査でも、昨年と同様に沿岸での漁獲および魚群の発見は少なかった。

また、北海道立釧路水産試験場北辰丸が、7月に40°30'～46°30'N、149°30'～162°30'Eの沖合域で行った流し網調査では、流し網1反あたりの漁獲尾数は38.7尾であり、昨年(42.0尾)と同程度の高水準であった。

以上のことから、大型魚の来遊量は昨年を下回るが、中・小型魚を含めた全体の来遊量は昨年と同程度からやや上回ると考えられる。

(2)魚体

東北区水産研究所の6～7月のトロール調査に基づく資源尾数の推定結果から、大型魚の割合は41%で、昨年の86%を下回ったものの、例年に比べ高かった。また、7月の北海道立釧路水産試験場北辰丸による流し網調査結果でも、大型魚の割合が61%と高かった。これらのことから、大型魚の割合は昨年を下回るものの、例年よりも高い。また、中・小型魚の割合は昨年よりかなり高い。

(3)漁期・漁場

東北区水産研究所、北海道立釧路水産試験場の漁期前調査結果ではサンマは表面水温8～10℃台で主に漁獲された。8月上旬現在、表面水温10℃以下の水温帯は千島列島に沿って色丹島東沖まで南

下している。一方15 以上の北上暖水が色丹島南東まで達している。従って大型船出漁後の初期漁場は北上暖水の北側から東側(色丹島南東沖)に形成される。また、この暖水南東側の親潮系冷水沿いに漁場が形成される可能性もある。

親潮第1分枝の張り出しは南偏傾向が持続し、津軽暖流の東方への張り出しは平年並であり、三陸沖の暖水塊はサンマの南下を阻むほど西には移動しないと予測されている。このことから、三陸海域へのサンマの南下は平年並と考えられる。従って、三陸海域(41°N以南、143°E以西)における初漁場は9月下旬から10月上旬に形成される。また、黒潮系暖水の北限位置はほぼ平年並の予測であることから、順次常磐海域へも南下する。

東北海区海況予報

今後の見通し(2006年9月～11月)

- (1)近海の黒潮の北限位置は、かなり南偏～やや南偏(35°20' N～36°20' N)で推移する。
- (2)黒潮系暖水の北限位置は、近海で平年並で推移する。
- (3)色丹島南東沖合と常磐沖の暖水塊は北東に、三陸沖合の暖水塊は西に移動する。
- (4)親潮第1分枝の張り出しは、やや南偏(39°N以北)で推移する。
- (5)親潮第2分枝の張り出しは、平年並(39°N以北)で推移する。
- (6)津軽暖流の下北半島東方への張り出しは、平年並(143°10' E付近まで)で推移する。

海況の経過(2006年1月～2006年6月)の特徴

- (1)近海の黒潮の北限位置は、極めて南偏～やや南偏(35°10' N～36°10' N)で推移した。
- (2)1月に下北半島東方に分布していた暖水塊は2月以降北東に移動し、5月以降色丹島南東沖に停滞した。1月に常磐沖に分布していた暖水塊は、ほぼ停滞し、5月には、4月に常磐沖に認められた暖水塊と合体し、その後も停滞した。
- (3)親潮第1分枝の南限は、1月は平年並(41°N以南)であったが、2月にかなり南偏(37°50' N)し、3月～5月に再び平年並(38°20' N～39°20' N)となったものの、6月にはやや南偏(38°20' N)となった。
- (4)親潮第2分枝の南限は、5月まで平年並(38°40' N～40°N以南)であり、6月にはやや北偏(39°40' N)で推移した。
- (5)津軽暖流の下北半島東方への張り出しは、5月まで平年並～やや強勢で推移し、6月にはやや弱勢となった。
- (6)東北海区の表面水温は、平年より低めで推移した。

現況(2006年7月)の特徴

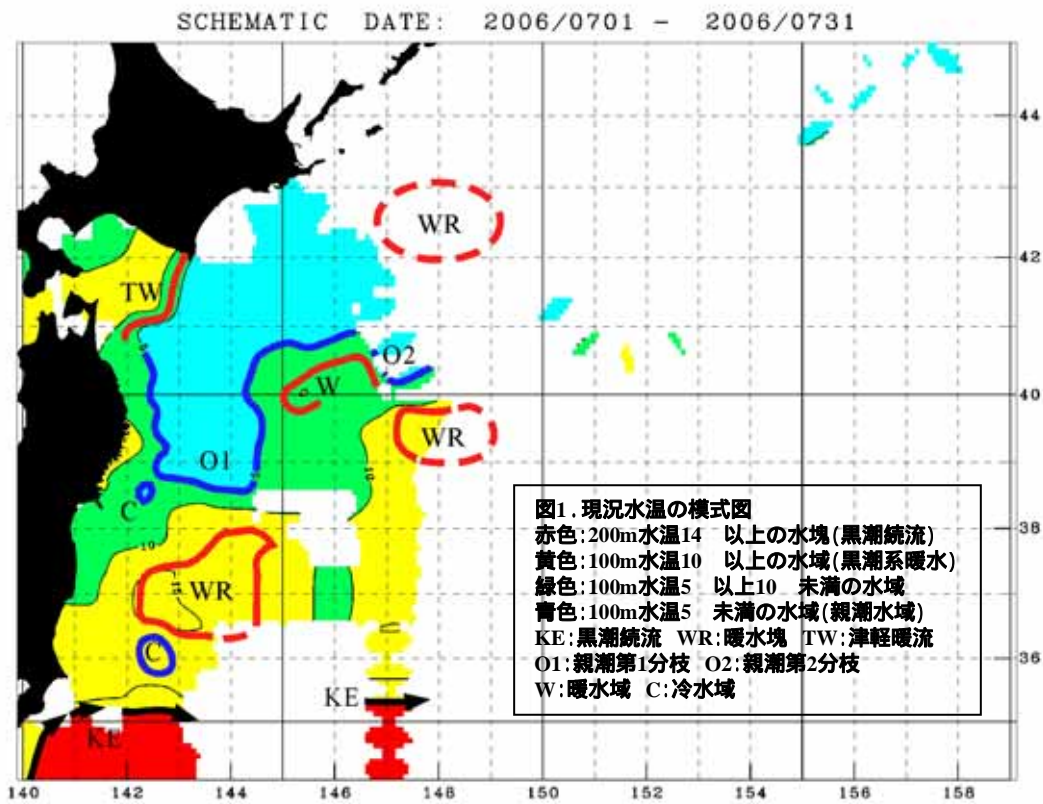
- (1)近海の黒潮の北限位置は、極めて南偏(35°10' N)である。
- (2)暖水塊が、色丹島南東沖合約180km* および常磐沖約250kmにある。三陸沖合約510kmに暖水塊が認められた。
- (3)親潮第1分枝の張り出しは、やや南偏(38°40' N)であり、連なる冷水がある。
- (4)親潮第2分枝の張り出しは、やや北偏(40°10' N)である。
- (5)津軽暖流の下北半島東方への張り出しは、やや強勢(143°E)である。

注：現況および今後の見通しは図を参照のこと。

「近海」は146°E以西、「沖合」は146°E以东を表す。

* 表面水温・人工衛星情報による。

現況(7月)



今後の見通し (9月下旬を想定)

